

# 息絶える金属

loremomnia

夜がゆっくりと深まっていく。

空間を満たしているのは薪の爆ぜる小気味いい音と、炎が作り出した影の揺らぎだけであった。目の前には革張りのソファに身体を横にした女が、シーツを首までかけて眠っている。

その薄く、すこしくすんだ白いシーツが作り出す女の身体の線はどことなく儚げに見える。

暖炉を背にした私は、女の頬にかかるブロンドの髪を慎重に払う。炎が作り出す淡い影が女の顔に落ち、ぼやけた輪郭を生み出していた。滑らかな白い肌の女に重なる影の黒は、どことなく曖昧だが確かにそこにある。対象の色を隣り合わせているにも関わらず、その境界ははっきりとしない。女の顔に変化は無かった。かすかにシーツの下の胸が上下し、息をしている事だけは見て取れる。

女は、死にかけている。

もうすぐみたい、と女が呟く。いつの間にか眠りから覚めていたようだ。その声は確かな音をもって私の鼓膜を揺さぶる。それがどこか不安で、恐ろしかった。

声に惑いはない。私には彼女がなぜ死ぬのかが分からない。しかし実感の湧かない死に近い事は、彼女の腕に触れれば良く分かる。まるで枯れ木のようなその感触に、彼女の身体は刻一刻と硬化を始めているのだと思い知らされた。

薪を焼く音だけが響く。少し焦げた匂いがするのは、彼女の楽譜をさきほど暖炉へと放り込んだからだろう。美しく、そして儚い旋律の曲だった。彼女はそれをあまり好まず、私はそれを酷く気に入った。彼女と出会って三日目の夜だったろう。まだ彼女が満足に笑える夜に私に弾いてくれたあの一曲が、今では昔日の様に懐かしかった。

約束を守って欲しい。彼女の二言目は、私に対する確認であった。私はもちろん頷いてみせる。けして欺くつもりは無い。言うまでも無く、その約束を破るつもりはない。ただ私には、彼女の吐く言葉がどうしてそれなのかと、ただその一点を量りかねていた。

人は生に貪欲である。誰もが自己を守る為に他者を拒絶し、安定の輪の中でのみ確認された浅やかな優越感のもと、他者に手を差し伸べる。人はそれを慈悲と呼び、私はそれを欺瞞と罵る。

過去にやりきれなさを感じながら、彼女の声が届き、私は我に返った。彼女を見る。眠っているような顔。瞳は見えない。瞼は重く落ち、そこから覗く長いまつげだけが彼女の今の身体とは裏腹に力強く見えた。

私は頷いてみせる。彼女には、届いているだろう。私の右手で息を潜める小さな拳銃が、救いようのないほどに重く冷たい。

肺が固まりかければ呼吸が出来なくなる。そんな事は、誰にでも分かる。しかし、それが現実になると言うことが理解できない。なぜ神はそんな事をさせるのかと考える。人に課した試練なのか、因果の巡りなのか。苦しみ死んで行く事に理由などあるのだろうか。あらゆる疑問が湧き、あらゆる頼りない答えが湧き、その全てに辟易し、そして最終的に神などいないのではないかと、という結論に達する。いつもの事だ。

女の病は鈇化症という。原因も治療法も不明な病である。ある日、突然に身体の一部が硬化しゆっくりと内臓を硬め始める。硬化は徐々に、だが確実に領域を広げる。どこから硬化が始まるかは個人差があり、例えば肺が硬化すれば窒息を起こし死に至り、脳が硬化すれば生ける屍となる。そして死後、硬化を続けたそれが全身に行き渡ると肉体は次第にいずれかの鈇物へと化していく。例えば冷たい鉄であり、例えば鮮やかな翡翠になる。

突然に訪れるこの奇病の皮肉な救いが、この鈇物化だった。死者はまるで時間が止まったかのように腐る事も朽ちる事もなく死ぬ直前の姿のまま、永遠に存在し続ける。この目の前に横たわる女は、今まさにそうなるうとしている。私に出来る事は、女との約束を守ることのみしかない。

私と女の出会いに必然は無かった。言うなれば、私が女との約束を守ることに必然は無い。つまり女は私との約束を、私と出会わなければ一人で行うつもりだったのだろう。そうであれば今頃、すでに女はかろうじて動く右腕を頼りに自身に向けた銃口の先で息絶えていた事だろう。

私との出会いで、女は生き長らえた。私は女の覚悟に水を差しただけなのかもしれない。女を最期に満たすのは束の間の安堵に酔ってしまった後悔か、それともそのか細い安堵が忘れさせた孤独に対する刹那の充足感か。果たして、それは幸か不幸か。私には分からないし、分かる必要もないように思えた。

「あなたと出会わなければ良かった」

まるで私を見透かしたような言葉を唐突に女は吐いた。私もそう思う。私は頷く。それが本心であって欲しい。私は返す言葉を探しあぐねて、脱力して宙を見る。ただ、空間を満たしているのは薪の焼ける匂いと音だけだった。

「私もそう思う」

そう思って欲しい。声に出した。はっきりと確かにその言葉を女の耳元に置いた。置き去りにした。女はかすかに上下する胸に次の言葉を落とす。それは、私が期待していた言葉であり、女がもっと早く吐き出すべき言葉だった。

苦しい、と彼女は呟いた。私はその言葉に安堵する。耐える理由など、何一つないのだ。

私は右手の拳銃をしっかりと握り締めて、薄い唇を開いたまま目を閉じる彼女のこめかみに添える。彼女の瞳は何色だったか。まるで遠い記憶のように、思い出す事が困難だった。もしすでに彼女の瞳が硬化しているのであれば。私は不意に夢想する。瞼を開いてみる気は無かった、ただ願わくば、鈇化する彼女の瞳は美しいアクアマリンであればと思う。アクアマリンに理由はなく、私が知る最も美しい宝石だという安直な理由でしかなかったが、私は何故か強くそれを望んでいる。

こめかみに触れる銃口の冷たさに彼女は唇を僅かに振る寄せた。私はかけるべき言葉に迷い、彼女はそれを見透かすように小さく、だがはっきりと微笑む。私は耳を傾ける。一つ深呼吸をする。

彼女の笑顔、しなやかな身体、生命力に溢れた姿、あまり好きではないのだけどと照れながら爪弾いたメロディ、わずかな時間の中で私の記憶に刻まれたあらゆる映像がめまぐるしく脳裏で切り替わって行く。彼女は幸福であったのか、私は出会って良かったのか、なぜ死ななければならないのか、神は何をしたいのか、それともこれは何の作為もない単なる偶然の結果なのか。

指先に力を込めた。

薪の焼ける音は、銃声を掻き消すには足りなかった。

数えていたのは、部屋のアラームがあれから何度鳴ったか、と言う事であった。彼女の呼吸が途絶えてから束の間、部屋の静寂を裂いたのが時報で、それから三度鳴っている。

薪の焼ける音は相変わらず続き、焦げ臭い匂いは消えた。

炎が作り出す薄い影が女の顔に落ち、ぼやけた輪郭を生み出す。純度の高い白い肌の女に重なる影の黒は、重く彼女の白を潰している。さきほど変わらないかのように見えるその光景に、僅かに新しい色が差し始め、私はそれに耐えきれずに彼女の全身をシートで隠した。

彼女の真意は分からない。私は出会うべきではなかったのか。ただ一つ、救いがあるとすれば、最期に私が彼女の腕になれたこと、そして彼女の意思の一つになれたことだった。

ふと、暖炉の脇に立て掛けられたアコースティックギターが目に入る。強く握りしめていた拳銃を無造作に放り、私はギターを手に取り、彼女の脇に腰を下ろす。焼かれる前のあの譜面はどうだったろうか。黒い影が落ちたシートの下の彼女の顔と、記憶の中の彼女の譜面とを交互に見つめながら、ギターを爪弾いた。もはや夢のような曖昧さの中で、滑らかにギターを奏でる彼女の後ろ姿が、シートの上で陽炎の様に漂い始める。流れるメロディは覚束ない。おそらく彼女は、もっと丁寧に弾くのだろう。

ギターをそっと脇に置き、ふと動きを止めた。視線の先の窓の外で、ゆっくりと黒は溶けていき新しい白に染まり始めている。彼女がもう見る事のない、新しい夜明けだ。私だけが見る、気の遠くなるほどに繰り返された夜明けだ。

願えるのであれば、二つあった。

彼女の瞳は果たして何色の美しさに染まっていたか。それが透き通る様な青であればいい。そしていつか私を置き去りにして降り注ぐであろう夜明けの色は、そんな彼女の抱く青であればいい。

そう、私は願っている。